読んで見つける、新しい世界、新しい自分

青いスピン

春
2022
創刊準備号

特集「創刊のご案内」2ページ

創作「キツネとウサギと虹」
まはら三桃 4ページ

エッセー「詩を求めるとき」
文月悠光 12ページ

イラストエッセー「学校あるある」
伊藤ハムスター 14ページ

コラム
「目で読むSDGs図鑑——持続可能（サステナブル）ってなに？」15ページ

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそっとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、
その本の世界にもどることができます。

そして、「青」は、
青春や青空をイメージさせる色。
これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、
あなただけの新しい世界を見つけてください。

先生がたへ

読むことを通して、さまざまなものの見方、考え方に触れてほしい。
思考を深めたり、想像を膨らませたりしながら、自分の考えや世界を広げてほしい。
そんな思いから、東京書籍では、小中学生のための新しい読み物機関誌、
「青いスピン」を創刊することにしました。（年二回発行予定）
本誌はその予告号です。
児童・生徒の皆さんにご紹介いただき、学校図書館で、教室で、
広くご活用いただけますと幸いです。

「青いスピン」3つの楽しみ方

❶ お気に入りを見つけよう

毎号、物語やエッセー、科学読み物など、さまざまなジャンルの作品を集めています。短い文章が多いので気軽に楽しんで読めるはず。いろんな作品の中から、あなたのお気に入りを見つけてください。

❷ ウェブで読もう

2022年9月、「青いスピン」のウェブページがオープンします。インターネットにつなげれば、いつでもどこでも読むことができます。
＊インターネットの通信費がかかります。

❸ いっしょに作ろう

年に１度、「青いスピン」にのせる新しい物語を募集します。あなたも作品を書いて、「青いスピン」をいっしょに作っていきませんか。

キツネとウサギと虹

まはら三桃
絵・カシワイ

ぽつぽつぽつ。

水滴がほおを打ったと思ったら、突然ザーッときた。

「雨だ。」

あまねは、はじかれたように走りだした。家を出るときは晴れていたので、かさを持っていなかったのだ。といっても、今も空は晴れている。お日さまがかがやく青空から、雨だけがシャワーみたいに降り注いでいた。

あまねは駅に向かう途中だった。しばらくそのまま走ったけれど、雨はだんだん強くなる。すぐにはやみそうにないので、少しだけ通り沿いのマンションの、軒先を借りることにした。

今日は、おばあちゃんが遊びにくることになっている。

「駅までむかえに行くね。」

おばあちゃんが着く時間を聞いて、あまねはおむかえを買って出ていた。電車の到着時間まで待ちきれなくて、早めに家を出てきたから、時間は十分にあった。

温められていたアスファルトは、むうっとした雨のにおいを放ちながら、みるみる濃いグレーに色を変えていく。

こういうの、何ていったかな？

ふと思い出して、あまねは空と地面を見比べる。

何かの動物の結婚式じゃなかったかな。

おばあちゃんから教わったことがあった。何年か前、夏休みにいなかの家に遊びに行ったときのこ

と。縁側の椅子で漫画本を読んでいたら、急に雨が降りだした。すると、裏の畑に行っていたらしいおばあちゃんが、ばたばたと帰ってきてこう言った。

「キツネのよめ入りだ。」

ああ、そうだ。キツネだった。

あまねは、すっかり思い出した。お天気雨のことを昔からそういうのだそうだ。

「人間が急に降ってきた雨にあわてている間に、キツネは堂々とよめ入りをしているのかもしれないね。」

そう言われて、あまねは目をこらして雨の向こうを見たのだった。キツネは見えなかったけれど、青空なのに雨が降っている景色は確かに不思議で、首筋がぞくっとした。

思い出にふけっている間に、雨足は弱くなっていた。

無事によめ入りできたかな。

小降りになっているうちに走っていこうと飛び出したあまねだったが、また足を止めた。

あれ？

マンションの前の通りの向こうに、空き地を見つけたからだ。短い雑草が生え、原っぱみたいになっている。

こんなとこあったっけ？

駅の方にはしばらく来ていなかったけど、原っぱなんかなかったはずだ。それなら前は何があったのだろう。

家だったかな。お店だったかな。

記憶はぼんやりとしていた。あったときにはあたりまえに見ていたものが、なくなってしまうと思い出せない。

あまねはまゆを寄せて考えた。何か、思い出しそうな気もした。でもなぜかあまり思い出したくないような気もする。じれったい気持ちになっていると、突然、原っぱの雑草の中から何かがはい出した。白いもの。

「ええっ！」

あまねは思わず声を上げた。

まさか、キツネ？

だが、白いものには長い耳があった。

「ウサギだ。でもなんで？」

あまねは通りを横切り、ウサギのそばへかけ寄った。地面には小さな穴が空いていて、ウサギはそこから出てきたようだ。近づいたあまねからにげだしもせず、雑草に鼻を寄せて、くんくんにおいをかいでいる。

あまねはそばにしゃがみこんだ。

「あなたの結婚式だったの？」

つい愉快な気分でたずねてみた。すると、頭の上で声がした。

「あ、やっぱりここだった。」

「あれ？　鹿島くん？」

体をひねって声の主を確かめて、あまねは、目を丸くした。そこにいたのは、クラスメートの鹿島くんだったからだ。クラスがえで同じクラスになったばかりだ。

「あ、柴田さん？」

鹿島くんのほうも、自信なさげにあまねの名字を確かめた。

「うん。このウサギ、鹿島くんちのウサギ？」

すると鹿島くんは困ったようにうなずいた。

「うん。こいつ、うちからここまで穴をほってトンネルを開通させたんだ。」

「へえ、すごい。鹿島くんちってどこ？」

「そこの茶色い屋根の家。」

鹿島くんは、ななめ向こうの二階建てを指差した。五十メートルくらいはありそうだ。

目を丸くしながらも、あまねは、それなら鹿島くんは、ここに何があったか知ってるかもしれないと思った。

「よかった。すぐに見つかって。」

鹿島くんはウサギをだき上げた。

「ウサギって穴ほりが好きなんだね。」

「うん。得意技。ここだけじゃないよ。マシュロンはあっちこっちの庭や畑で発見されてる。」

ウサギの名前は、マシュロンというらしい。白くてふわふわのウサギに、ぴったりのかわいい名前だ。

「じゃあ、この辺りの地下は、トンネルだらけなんだね。」

見えないけれど……。

「うん。地下鉄マシュロン線。」

「ははは。」

鹿島くんって、けっこうおもしろい人だ。

「鹿島くん。」

あまねは、すっかり打ち解けた気持ちになって、もう一つの見えないものについて、たずねてみることにした。

「ここって、前は何があったんだっけ？」

すると鹿島くんはあっさり答えた。

「歯医者さん。」

「……あ、そうか。」

あまねは、はっと顔を上げる。記憶のすみがカチッと音を立てた。そういえば幼稚園のころ一度だけ行ったことがある。小さな虫歯ができて削ってもらったのだ。

診察室は消毒のにおいがつんとして、先生の机には、注射器や先のとがった細いドリルみたいな金属が並んでいた。椅子に仰向けになったあまねはにげだしたかったけれど、歯科衛生士のお姉さんに「強いわねえ。」なん

てほめられて、必死で我慢をした。すると、口にゴムカバーみたいなものをかぶせられた。気持ちが悪かったけれど、目をつぶり、こぶしをぎゅっとにぎりしめた。

そしてついに、

「キャーン。」

誰かの悲鳴みたいな音が聞こえてきた。机の上にあったとがったドリルだと思ったら、もう我慢ができなかった。つぶった両目からなみだが勝手に出てきた。治療はすぐに終わったのに、あまねは家に帰るまでずっと泣き続けていた。

すっかり思い出して首をすくめていると、鹿島くんが、不思議そうな顔で聞いてきた。

「柴田さん、結婚式って何？」

「はあ？」

「さっきマシュロンを見て言ってただろう。」

「ああ、あれね。」

あまねは、キツネはお天気雨のときによめ入りをするのだという説明をした。鹿島くんは、ふに落ちないのか、ぽかんとしていた。

キツネにつままれたみたいな顔だな。

あまねはこっそり思う。

「おばあちゃんに教えてもらったんだ。」

そこまで言って、あまねははたと思い出した。

むかえに行かなきゃ。

「駅に行くんだった。じゃあね。」

あまねは、鹿島くんに手をふって駅に向かおうとした。けれど、一歩ふみ出した足をまた止めた。

「わあ！」

見上げた空いっぱいに、大きな虹がかかっていたからだ。

赤、青、むらさき、オレンジ……。

「めっちゃきれい。」

こんなにきれいなたくさんの色が、空のどこにかくれていたのだろう。

「おっ、虹だ。」

後ろで鹿島くんも大きな声を上げている。

「じゃあ、また明日。」

あまねはふり返ってもう一度手をふった。

鹿島くんも手をふった。

「うん。学校で。」

あまねは虹に向かって走った。

まはら三桃　作家。福岡県出身。著書に「奮闘するたすく」「たまごを持つように」などがある。

エッセー

詩を求めるとき

文月悠光

「人生には詩が必要だ。」そう断言できる人は、あなたの周りには少ないかもしれない。教科書にのっている詩に退屈して「何のために詩なんて読むのか。」といぶかしく思っている人もいることだろう。詩を書く者として、その疑問に答えたい。

日常生活で自分の感覚に注意を向ける機会はまれだ。外部の情報ばかり気になってしまう。無意識にいらだったり、胸が熱くなったりすることはあるが、なぜそれが起きるのか、体が今どのような状態にあるか、よく分からないことが多い。

そんなとき、詩を読むことは「今の自分」を知る手がかりになる。詩からまず何を感じるか。素直に受け取ってみるのだ。よろこびか、さびしさなのか、つき上げるような興奮なのか。詩のどの部分からその感情がわき出しているか、細部を観察してみる。すると、今の自分にとってささる一行や、心地よい音のひびきが見つかるだろう。そのことで今の心の状態が見えてくるのだ。

日によって、気になる一行が変わることもある。たとえ詩の内容が分からなくても大丈夫。「今は言葉がうまく入ってこない。」というのも、一つの発見だ。この読み方は、「言葉の解像度」を上げる訓練にもなる。一行を吟味する力を養い、自分の気持ちをより的確に表現することに役立つのだ。

詩を求める理由について、私自身の体験もつづってみよう。私はあるとき、谷川俊太郎さんが二十代後半に書かれた作品を読み返していた。谷川俊太郎さんは一九三一年生まれの詩人で、日本を代表する詩人の一人。自分と同世代だったころの谷川さんがどんな詩を書いていたのか気になったのだ。谷川さんといえば、作風もお人がらも泰然とされていて、さっぱりとした印象が強いかた。だが、二十代後半のころの詩に刻まれていたのは、意外なほどに激しい感情。いかりや葛藤があちこちににじむ。「こんな作品も書かれていたのか。」と新鮮なおどろきを覚えた。

特にひかれたのは、「頼み」という作品だった。〈裏返せ　俺を〉という詩句のくり返しが音楽的にひびく。〈俺の胃や膵臓を草の上にひろげて／赤い暗闇を蒸発させろ〉といったいかりを経て、〈裏返せ裏返してくれよ俺を〉と懇願する着地点は、もの悲しく、さびしげでもある。けれど読みながら、私は己の傷ついた心がいやされていくのを確かに実感した。

いかりやなみだ、血を見ると、それがちゃんと「きたない」ことに、安心する自分がいる。同時に、自分の内にもそれと似たものがあることに気づく。もちろん詩の言葉は「きたない」だけではない。そこには日常で忘れかけた感覚がていねいに言語化されている。言葉にすることは、その存在を「認める」ということだ。ふがいない自分。繊細すぎて殻にこもる自分。相手にとげとげしい態度をとっては、自己嫌悪におちいる自分。みにくい自分――。私たちは、こんなにもむき出しで弱い「自分」をかかえながら生きている。

一見「きたない」と切り捨ててしまいそうな、認めがたい感情を、詩は静かに受け入れてくれる。そんな包まれるような体験を求めて、私は詩を読み、詩を書いているのだ。

私たちは社会との間で、ときに折り合いをつけられず、いらだち、なみだを流す。学校や家庭での身近な人間関係になやむ人もいるだろう。「普通に生きる」ことの難しさと、ままならなさ。そんなとき、詩はつらい気持ちの吸収剤となり、あなたのいちばん近くに寄りそうだろう。「本当に？」と思った人は、図書室にある詩集を見てみよう。しんどいときは思い出してほしい。ふがいなくて、かっこわるい「私」を、詩の言葉が救ってくれることを。

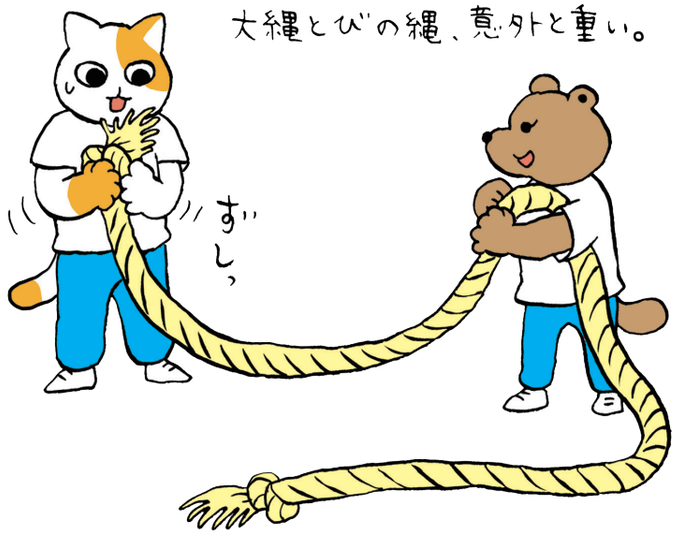
文月悠光　詩人。北海道出身。著書に「適切な世界の適切ならざる私」「洗礼ダイアリー」などがある。

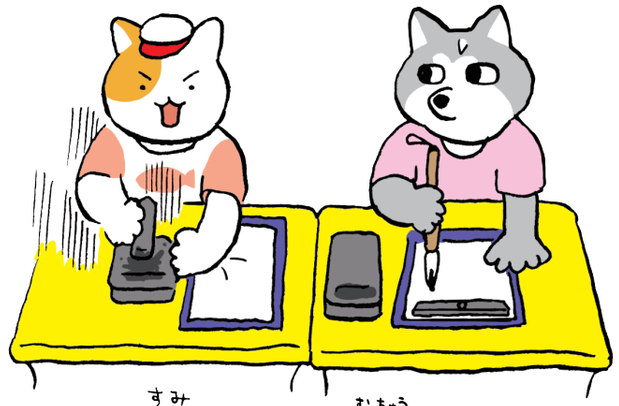
絵・尾柳佳枝

学校あるある

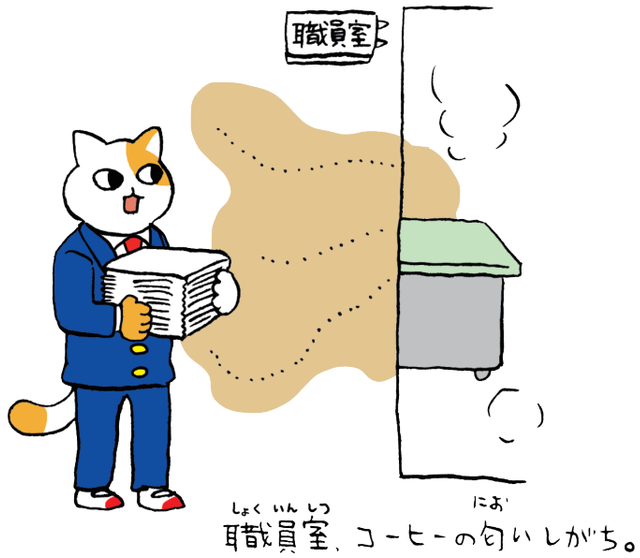
伊藤ハムスター

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。





書写で、墨をすることに夢中になりすぎる。



職員室、コーヒーの匂いしがち。

伊藤ハムスター　イラストレーター。多摩美術大学油絵科卒業。「こども六法」「源氏物語解剖図鑑」などのイラストを担当。

目で読むSDGs図鑑

「持続可能ってなに?」

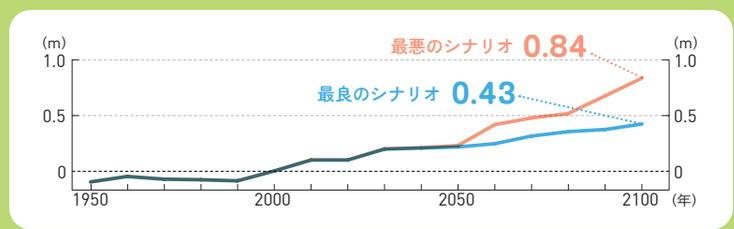
SDGsってよく耳にするけれど、なんだろう? SDGsとは「持続可能な開発目標」の略称です。「持続可能」って「長く続けていける」ってことだけど、実は難しくて、深〜い。これから始まるこの連載で、写真やグラフ、絵などを「読み」ながら、みなさんといっしょに考えていきたいと思います。

「このまま」で進んでしまうと……

ここは、神奈川県の逗子海岸。レオさんは、この春に中学一年生になります。現在の身長は145センチ、この写真で海面は足元から21センチのところです。

このまま温暖化が進むと、例えば80年後、レオさんが90歳になるころに、海面がどのくらいまで上昇してしまうと思いますか? うーん。かたぐらい……でしょうか? ええ、最悪の場合は。そして、最良の場合でも、その半分程度になると推定されています。「このまま」進んではたいへんなことになってしまいそうです。

100年後のために、今、あなたができることはなんでしょう? それを見つけるために、SDGsの「持続可能」について考えてみませんか。



過去および将来の世界平均の海面水位変化

＊「IPCC 海洋・雪氷圏特別報告書」(2019年)をもとに作成

SDGsは「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称です。2015年9月の国連サミットで採択され、持続可能な世界を実現するために2030年までの15年間で達成することを掲げた国際目標です。社会や経済、地球環境についての17の目標と169のターゲットから構成されており、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

名前
レオさん(小学6年生・12歳)

好きなこと
おでかけ、おしゃべり、映画を見ること。

好きな教科
総合

どんな人になりたい?
日常生活であたりまえのこととして地球にやさしい生活ができる人になりたい。

地球のためにふだんやっていること
食器洗いのとき、環境に配慮された洗剤を使い、こまめに水を止める／ゴミを見つけたらできるだけ拾う／給食を残さない／マイボトルをいつも持ち歩く／ストローを使わない／マイバッグを使う／生ゴミは庭の土にうめる、など、ふだんの生活の中で自分でできることをしています。

撮影・進藤健太

作　品　募　集　の　お　知　ら　せ

募集内容

小学校高学年から中学生を読者対象とした物語、小説。

応募規定

字数：400字詰め原稿用紙15枚以内。
（パソコンの場合、6,000字以内。）

書式：手書きの場合、400字詰め原稿用紙（縦書き）を使用してください。
パソコンの場合、A4判横向きに縦書きでお願いします。末尾に400字詰め原稿用紙で換算した枚数を明記してください。
［手書き・パソコン共通］A4用紙1枚に下記の内容を明記し、同封してください。
①作品のタイトル・枚数、②作者名（ペンネーム・本名）、③住所・電話番号・Eメールアドレス、④年齢、⑤職業
＊ペンネームの場合は、必ず本名も明記してください。ペンネーム・本名には、読み仮名を付けてください。

注意事項

- 応募資格の制限はありません。ただし、未発表の作品に限ります。他の児童文学雑誌やコンクールに応募した作品は対象外です。
- 応募作品は第三者の著作権を侵害していないオリジナルの作品であること。また一人一点に限ります。なお、応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。

締切・発表

締切：2022年8月31日（水）　当日消印有効
発表：「青いスピン」第2号（2023年4月発行）、
　　および東京書籍ウェブページ
＊掲載作品には小社規定の原稿料をお支払いします。なお、掲載された作品の出版権は小社に帰属します。

お問い合わせ・作品送付先

東京書籍株式会社「青いスピン」作品募集係
〒114-8524　東京都北区堀船2－17－1
✉spin@tokyo-shoseki.co.jp
＊審査結果に関するお問い合わせには応じられません。

選考委員

角野栄子（童話作家）　西本鶏介（児童文学作家・児童文学評論家）
安東みきえ（児童文学作家）

【応募に関する個人情報の取り扱いについて】東京書籍では、ご提供いただく個人情報の処理について、適切な安全対策を講じ、漏洩、滅失およびき損が生じないようにいたします。つきましては、下記の内容をご理解いただき、ご同意の上で個人情報を提供くださるようお願いいたします。また、16歳未満の方は保護者の同意を得た上でお申し込みください。■個人情報の利用目的・開示：ご提供いただいた個人情報につきましては、次の目的の範囲内で取り扱います。〇選考作業および入選等のご連絡のため。〇個人情報の属性の集計・分析を行い、個人が特定できないように加工したものを作成し、東京書籍のサービス開発・提供等を行うため。■個人情報について：法令等により必要と判断される場合を除き、本人の同意を得ずに第三者に提供することはありません。個人情報のご提供は任意ですが、応募いただくために必要なものです。ご記入いただけない項目がある場合、応募をお受けできない場合がありますのでご了承ください。■委託について：ご提供いただいた個人情報につきましては、選考や書類の発送など利用目的の実施に必要な範囲内で、業務を委託する場合があります。■窓口：ご提供いただいた個人情報に関する質問および変更等については、「青いスピン」編集部（spin@tokyo-shoseki.co.jp）へお問い合わせください。

青いスピン　創刊準備号
（2022年　春）
2022年4月1日発行

発行者　渡辺能理夫
発行所　東京書籍株式会社
印刷・製本　株式会社リーブルテック

本社　〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445（営業総轄本部）Fax:03-5390-6012
支社・出張所　札幌 011-562-5721　仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467　金沢 076-222-7581
名古屋 052-939-2722　大阪 06-6397-1350
広島 082-568-2577　福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770　那覇 098-834-8084

ホームページ　https://www.tokyo-shoseki.co.jp
東書Eネット　https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/
東書WEBショップ　https://shop.tokyo-shoseki.co.jp

表紙絵　しらこ
巻頭絵　佳奈
アートディレクション　山田和寛（nipponia）
デザイン　山田和寛+佐々木英子（nipponia）

東京書籍

令和4年4月発行　Copyright © 2022 by Tokyo Shoseki Co., Ltd., Tokyo　All rights reserved.　Printed in Japan
この冊子は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

A6385